通して、描かれています。

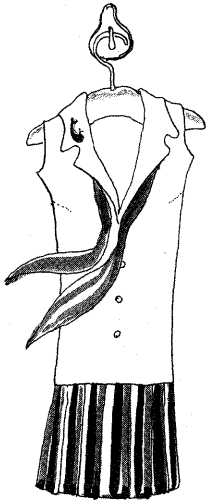
「発達とは基準としてみるのでなく、『個々の発達の過程』と考え子ども一人ひとりの発達の道すじを大切にする」（26頁）ところに、保育の新しい目が開けてゆくことを、この著者は三十年の蓄積の上にたって、言い残してくれているのです。貴重な発言だと思います。

（元・お茶の水女子大学）

『ギラギラ』西田俊也（マガジンハウス）『サマータイム』佐藤多佳子（MOE出版）

皆川美恵子

夏の日の読書にふさわしい児童文学の本二冊を紹介してみたい。著者たちの文体には、今までの児童文学の文体とは大いに異なる、新しいリズムが息づいている。ともに一九六〇年代生まれの若き作家であり、日本の児童文学の世界にも、ようやく時代の感性が新しい波となって発信され出したことを実感させられる。



『ギラギラ』は、まるでハード・ロックのビートが力強く打ち出されたかのような躍動するリズムの文体である。『サマータイム』の文体はそこへいくと、ジャズを都会風に洗練させ、クールでありながら人の息の温みも感じさせる弾みのある響をもって

いる。冷たいリンゴのシードルでも飲みながら、本を読み進み、それぞれの文体のウェイヴに身をまかせることの心地よさ。同時代のフィールドから届けられた、感性の冴えわたった熱い声、涼やかな声を聴く歓び。これが読書の醍醐味でなくて何であろう。

『ギラギラ』は、十八歳の大学受験をひかえた高三の少年が、十年後の二十八歳になる自分に向けて出した手紙三通から構成されている。手紙を書く理由は、こうである。

「オレは十年後のオレに今のオレのことを教えてやる。オレがどんな生活をして、どうやって毎日を過ごし、どれくらいのことを考えているか、ここに書く。オレはオレやから、オレはオレのことを忘れるわけないけど、たとえば八歳のオレがどんなことを考えていたのか、ほとんどわからなかったりするから、オレはオレのためにきちんと書き残しておいてやることにする。」

オレは地の声、関西弁で、心の思いを爆発させながら手紙を書いてゆく。学校という管理がふるう暴力への批判。異性、同性の友への真率な意見。大人たちの生き方への疑問。オレは手紙を書くことによって、卒業に至る自分の卒業制作を行っているのである。

パッション（熱情と受難）は、手紙という容器に注がれることによって、古い時間、新しい時間をギラギラと輝かしく、かもし出している。さらには十年のヴィンテージ・オールドの香りを匂わせてもおり、言葉のもつ秘密の力を知ったものの手による作品であることを示している。

『サマータイム』は、佳奈と進の姉弟をめぐる連作物語のひとつである。姉弟が左腕を交通事故で失くした少年、でも「体の中にエネルギーの発光体を持ったような、びんびん光っているような」少年とめぐり会うことによって、思春期がみずみずしく彩られていく。少年と弟はピアノが、少年と姉は自転車が親愛の記号に収斂されている。ピアノと自転車は、進と佳奈の生まれもった気性の形を証明する大

切な道具なのである。

夏休みが終わろうとする日、三人は、ブルーのミントゼリーとグリーンのリキュールゼリーを混ぜて冷やし固めた、大きなゼリーをスプーンですくって食べる。佳奈特製のそのゼリーは甘くはない。塩味がきいている。

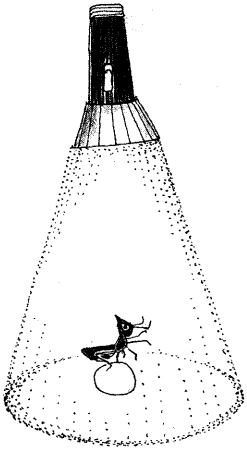
少年は叫ぶ「あ、海、海だ！」

「青と緑の冷たい、しょっぱい、不思議な味の海だ。ぼくらは、頭を寄せあい、時々誰かとスプーンをカチャッとぶつけたりしながら、それを食べた。スプーンの上のゼリーは、まるで透きとおった色ガラスのかけらのようなんだ！　ひと口めは、南の海の波、きらきらしたブルー。ふた口めは、海草の色、謎めいたグリーン。み口めは、深い冷たい水底の色、青緑。」

食べれば食べるほど塩からくてじんじんする、小さな海のゼリー。三人いっしょに夏を終える儀式はこうしてなされた。

少年の引越。そして六年後の、夏の日の再会。十二歳の少女が十八歳となり、少年も十九歳を迎えている。少女を乗せた少年の漕ぐ自転車の滑りに、透明な抒情が光る佳作である。

（十文字学園女子短期大学）

たくさんの児童文学を読む

今井　和子